

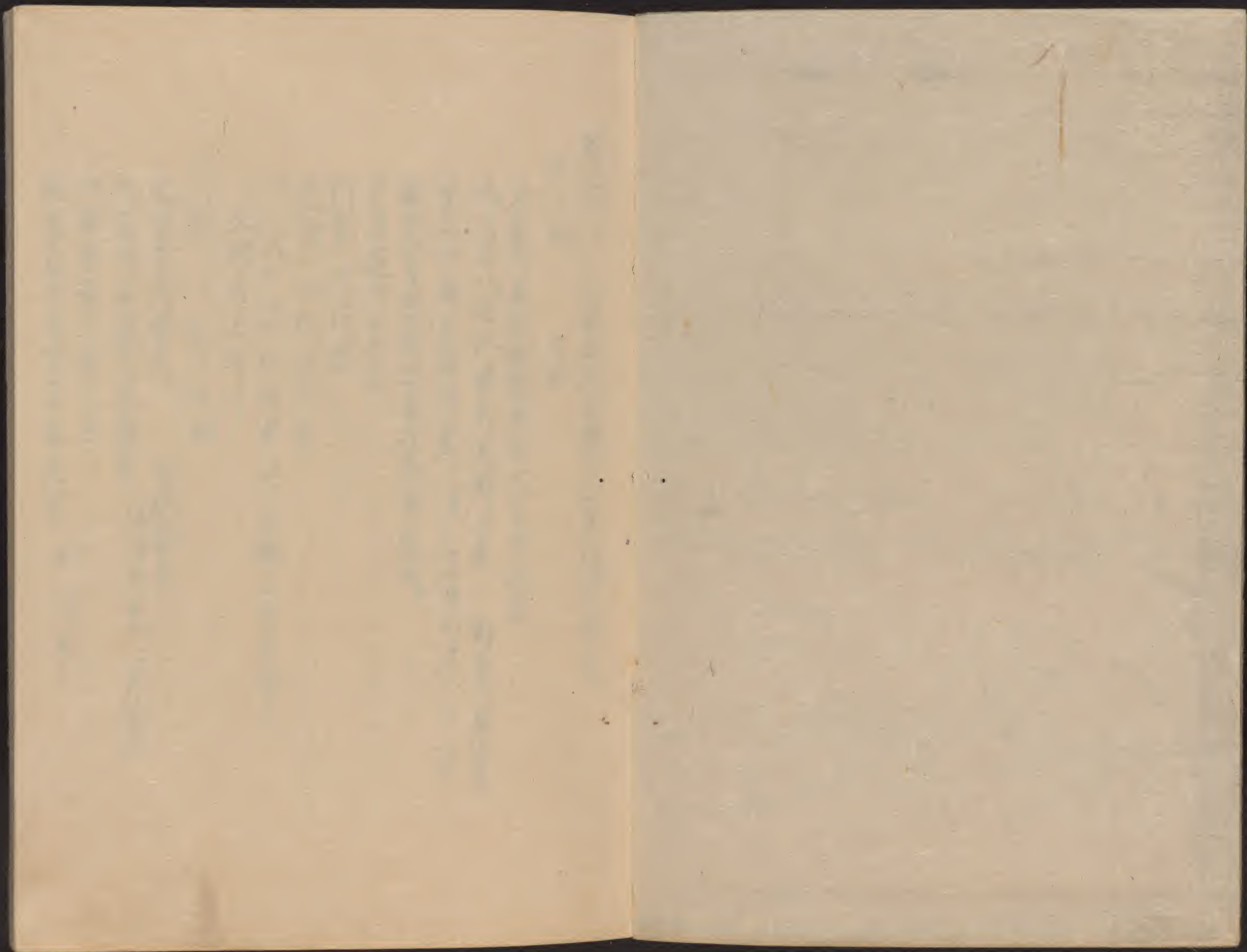
823

M. 8 N. 2

紙江入楚

賢本

10



賢木

廿二歲

右將

二條右大將哉^テ左大將任^ス左政大將

云桑清具^ハ相副^ハ政官可有下向^ス

九月七八日以源氏系野^ノ文^ノ對面^ニ清具^ハ而^シ度

十六日^ハ政^ノ文^ノ郡^ノ行^ハ度^ス 兼^テ文^ノ十^ノ歲^ノ清具^ハ而^シ之^ニ十^ノ家

源氏^ハ付^テ林^ノ枝^ノ文^ノ於^テ清具^ハ而^シ度

十月院^ハ清具^ハ而^シ度

行幸^ハ并^テ行^ハ啓

十一月一日院^ハ崩^リ清具^ハ而^シ度

十二月廿日^ハ清具^ハ而^シ度^ス中^ニ文^ノ移^リ之^ニ桑^ノ文^ノ給^テ度

大將^ハ君^ノ系^ノ給^テ度

廿二歲

天下^ニ諒^ス圖

大^ニ爲^リ君^ノ系^ノ居^テ度

宿^ニ物^ノ袋^ノ度

二月^ハ清具^ハ而^シ度^ス殿^ニ任^テ尚^ノ侍^ノ度

臘^ノ月^ハ夜^ノ養^ノ卷^ノ爲^テ清具^ハ而^シ度

以^テ梅^ノ蓬^ノ爲^テ清具^ハ而^シ度

桃^ノ室^ノ姫^ノ君^ノ爲^テ清具^ハ而^シ度

槿^ノ院^ハ是^レ也

大得君未思離給夏

大得君又於細殿之局見系尚侍夏 近來夜行

以少得自前臺之次在邊大得君夏

密通之系夏一日發居邊臺中夏 無實歲夏

秋詣雲林院夏

習讀天台法文夏

在書於二系院夏

在書於槿森院夏

在雲林院紅系於之系夏夏

九月廿日夜係氏於文以方清物路

退出之次以并年見係氏誦白虹貫日之句夏

系東文清方啓中文給夏

臘月夜尚侍送書於係氏夏 有返寄

十一月一日故院清國忌年書於中文夏

十二月十金日中文清八拜夏

偕於日中文清為飾夏 清戒所山座主

廿四歲

余婦君同出家夏

正月入道宮給夏

在太官上致仕表夏

其丙日之位中得亦系含有掩額興夏

十日許之後中得負德夏

中得二席君親多事時八九家紅梅右太官是

尚侍君里居之次度今密通夏

雷雨之日又大殿未尚侍君清方見付係氏帶置紙夏

二系太政太官以尚侍夏被訶申太官夏

賢才

以二河并流為二卷名

ばをこはる年之りより原氏に二条ありより大宮あり
 なまうくのりよりなり

秘壽日

神うけまうーれ務にあつたといふはゆゑなくまうの神を
 祀らうとていふてゐるとのつうとまう

和ニハナニといふてハナクエのフクとみり

松乃子（字夢春）あり

板樹

日本紀

賢本曰

柳俗子

秋文此所云了りちるなる所也

秘
秋好中交と秋交群行九月十六日北河系旅のりし
毎日
ふらんほりの公ほろく
之系河系旅のりし

每曰

ふらんほりの公ほそく
とおれそめはとさほろり古名あまうらん

之平河島前多らるゝとてん
り市名多しとてん

乃乃乃乃乃

大敵に盡つて夢とて所息を甘るるなり

くさくさくさくさく

ふりとりせん

夢と云ふもののうらりたるは自然なり

源の心を
ありありと
世に示す

交れしらべ

秘
此
文
之
妙
乎
之
秘
曰

秘
曰

そのうち

秘
養ありありのこころとてほやう

まじやう

^秘原のうとひなふりーはる実あり

を疾りけりそこのくぬふ

物の字にわづまゝにふくまふと所息にふくまふと

ふろのわしと

秘
為
所
至
之
方
也

組
原よしのと
何と貪欲に
起る者なり
と理を告げ
し

うきうきと一丘ありは伊勢なり終りの判を

望しうらゝ 車馬に 是れ一とらゝとていふ事あり

おろのくくつりのあまゝいふことになつたれ

は 母よりしれ 毎よりしれと云ふこととらゝとていふ事あり

番 離院時親子女五郎はくつり傳りり 母は親子女五郎のりりともいふことなり

世は母いふことなりとていふ事あり

大徳の浦

本よりいふに之はくつりなりぬきのみなり
母文女市微子武たて定親親女兼年六年為奇文場
後天曆二年三月入内同三年四月為女市生親子女五郎
為奇文兼向伊勢之時母女市被相伴雖横は例延長後を
代りりしれ例もことになつたけきなり

秘 按ちききりといふ載

は 海山離院の時親子女五郎といふなりは例はれと延
以後のりりしれ例は用ふははるなりは例にされし例と
ことになつたけきなり

母 母よりしれといふこととらゝとていふ事あり
番 離院時親子女五郎といふなりは例はれと延
定親親女市微子のりりしれ例は用ふははるなりは例にされし例と
は例なり

番 村との市女親子門親女天延二年は母文は立く下向
りりしれ母微子女五郎のりりしれ例は用ふははるなりは例にされし例と
定親親女市微子のりりしれ例は用ふははるなりは例にされし例と
は母よりしれといふことなりは例は用ふははるなりは例にされし例と
は例は用ふははるなりは例にされし例と

いとんちれり

ことなり

りりしれと云ふことなり

ちねれきり

御せり

多いから 結構いゝから
人々が公衆の面

糸
市見河之原ヨ對面ナリ

神
神皇正統記
乙未
乙未

和歌のふよ、鹿は、
 物づいのまゝなり。又
 をあへりしとす。身
 とろとをうけたり。て

りゝのゝ

五之榮 京極八所

矣

癸
之系京極の多し沛息匠を以てりゆふとありき

秘日

秘
あひまふ

西へてゆく
まはるる

秘
此丹多入海草中者乃可服

荷に也

私狀より案外に所と御息所の軍へ思ひつか

原をかりのそとく
近なりぬ

院の上をゆく

秘
桐
壺
亭

事
 中令此末よ山形御一
 今手流氣又此からとと
 秘日

秘曰

序のよそいきのうらな

清息の公と原のおとらふに成る

おほおほ

あまのこころのうきうき

ナカツキ
九月七日

原のたそがれ

十日群行ち義以て時を又教ふべし

秘
十六日ハ秋多かり候之由ニ

麻文群 卯九月十六日 泚系 爲の

私を群る二十日此よりなり

女

濟息河之わづらひ
 周章とみえ

多々々々

秘
あつちよりと連なり

いづや

必沛泉源之

^ら勢のそとといふも我よくや句はちぬにーく

又及川奇

秘
不及川雪
史書曰

和名いづやとふとあらほこぞいきり

てありとふもとまほしく
おのゝけをあらはせ

五九

地痛をうりぬきと云ふにまじ

或抄評記よりわかれたるものなりと云ふ

わかれ

秘 とういふに

けりしを記しと云ふ

秘 是より後のことなり

の記しを記しと云ふ

秋の記しを記しと云ふ

或抄評記より秋の記しを記しと云ふ

かゝる記しを記しと云ふ

宗書

面影を記しと云ふ

秋の記しを記しと云ふ

道徳院の記しを記しと云ふ

面白きものなり

それと云ふ

そのことによりて

いふことによりて

いふことによりて

いふことによりて

いふことによりて

評記より

秘 十人

或抄評記より

いふことによりて

秘 十人

いふことによりて

秘 十人

いふことによりて

秘 十人

いふことによりて

いふことによりて

秘 十人

いふことによりて

秘 十人

秘 十人

いふことによりて

秘 十人

いふことによりて

秘 十人

いふことによりて

いふことによりて

秘 十人

いふことによりて

私る居又衛門より居天の字とくふふと
祢前よりきりし五化のりとの出又きりぬと

かづぐりーく

祢とあこ 事日

ろろろろーき

ゆきふくきふく山奥の里はきりきり

あひいふいふのりーぬーにとあれ

祢つるされりのと

私伊勢斎文家

頭一人

四位左位殿とく若諸太主任之
お富保立位下

助 相富正六位下

允大少属大少

いふさされつるささわさささささ

いふさささささ

火焼屋と炬舎火炉 順和名 助鋪又こ

火炬小み二人

山城は葛野郡之奈氏之臺女とく

延喜式よりきり

私るよりきり

いふねとささささ

私文の祢膳とささささささ

と原のねとれとさ

市奥のなか 文れささささ

山の野はさささ

肉はささささ

ささささ

原と

わささささ

とくつとさささ

あささささ

私る

いさささ

ちと腹立のなか

私るさささ

うさささ

さささ

注連

早記 万葉

市保縄 旧本記

さささ

さささ

さささ

市奥の女房

いささ

市奥のなか

さささ

私るさささ

さささ

さささ

さささ

さささ

あけくねい 秘 ぬふふれいぬふふれぬふふれ

秘 ぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

ううあけくねいぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

中々ううあけくねいぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

こあさささぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

は山の對いぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

とあけくねいぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

初学記云月七日為魄 宿氏神文へあけくねいぬふふれ

ううあけくねいぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

月比中ぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

宿なる宿いぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

あけくねいぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

あけくねいぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

あけくねいぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

公けくねいぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

あけくねいぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

ううあけくねいぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

秘 ぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

秘 ぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

秘 ぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

秘 ぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

秘 ぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

秘 ぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

秘 ぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

秘 ぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

秘 ぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

秘 ぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

秘 ぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

秘 ぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

秘 ぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれぬふふれ

どういふところやあまのふたり

あはれおとこ 家老のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

かきくさくさといふまうてとてさうさうてあまのふたり

家老のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

とていふはあはれおとこの御座る

末通女 少女 日記 少女

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

柳屋のさぶらひとていふはあはれおとこの御座る

三

しつとてふふふふふ

此身をのふふふふふ

今宵少々之ぬーと

之眼心中不平處
一宵清話又成空
面自幾時

やうくいふはと

^秘卿々ろと佐宮一様一主

飛

秘
ん
の
う
と

和芝居見物の女中——と前より来る町奉行にけられや
なりとも下宿を定うものなり——とばは衛と落着き——つらと
それよ今又原のおり——とくちなり——とゆれとあれから方
ねむのせいでそれと所見物の女中よりくるものは金のかん
ととり——よぬとなくやうになどとといふそれなり

久とめりふらん

秘藏書院藏
殿上人
朝夕
此
所

くそれ比のぼよあふんとあうのとやと

座の多し

時文の如し

名
人
の
こ
ろ
に
お
け
る
あ
ら
わ
い

武所流銃よ、あつとりふたれ

るにあたり、うらなひの

私を此よりあはれむとたゞや此を

おしりーおしりーあやあやーい

浮世身は平よ。かゝりてうたわひてうたふ人
 ありたし
 とありしにうり出つらん心なかり

必
之秋未晚之候、一夜將明之天、別緒依依之情、虫色切々之恨、
遭遇斯時、こゝろよつらり出で、根ありとさうり

初めは、
原山、息山、平山よ
金うり義ありよ
久しく中絶つ
金とせざるなり
病はあらず

曉原

のういしにをきとこにきめ秋のきこうし

秘
ばはくりやうりやうりやうり
やうりやうり
曉の光るうり
みはるる
みはるる

とけのふりやうく

業平のたぐりの役もく母をとりよて置かうのか

たよりー曉のうられよるふらふら

必 曉のうられよるふらふら あまの

大庭四時心物苦 就中腸断是秋天

私に別々常れ曉よこころてみとぐーれ對面いり

なるとようになれ秋の元とわりのうらむ夢をみせぬ

松虫けりしる

私に常氣秋よ今も人の心はけりいりあふ

よりあまの心をいともあふくこころゆめ

水原抄に中くこころゆめといふに清見所の心をあらとて

ば糸いふとあふけりよりあまの心をいともいふに

清見所へのうらむとてあふけりよるは原氏の心二首を

とて清見所の心一向はあふけりあふけり

とて清見所の心一向はあふけりあふけり

よりあまの心をいともあふくこころゆめ

よりあまの心をいともあふくこころゆめ

必 夏のけり出いりあふけりあふけり

とて清見所の心をいともあふくこころゆめ

必 秋のうられよるふらふら あまの

必 秋のうられよるふらふら あまの

必 秋のうられよるふらふら あまの

必 秋のうられよるふらふら あまの

必 秋のうられよるふらふら あまの

必 秋のうられよるふらふら あまの

必 秋のうられよるふらふら あまの

必 秋のうられよるふらふら あまの

必 秋のうられよるふらふら あまの

必 秋のうられよるふらふら あまの

必 秋のうられよるふらふら あまの

必 秋のうられよるふらふら あまの

必 秋のうられよるふらふら あまの

中をふれ少くもきりてふといふはあり。然るに
 秘中くともゆゑなるという面白き秘を或はきりな
 必の後さるる月のりといふは必の秘なる面白き
 所なく秘なる秘と出するといふことなり。此の
 月と秘なるはきり。やんとするなり。

組
ほめをば程彼よりしとぞりそのあよ丁そくをり此ふい
そ三如れと後悔ありし

あめとあとしていさしくまゐりつゝむふとまゐり
 后のわといと霧を
 おりぬくちよそへり

女もえ公つゝ治
清見所の公中又さう

あやうらむ心づく　さふぬくをばのやうなりくはあり
あはれうらのたうりといふとらるるを
なうさうとあり　必さうぬくをれりあり

[illegible]

おへあひく 暖炉の文火をぬきと山下りとなりいとゆりゆり
あぐり記つうしめ

いとひたり
あり一病くはりてやうにありとてしり
病つてまゐる病うくしり是うくいよくしりまねは病をくあり
おとこる所と
^秘あまの病は病をくありあまをくしりて書こ
あまの病は病をくありあまをくしりて書こ
あまの病は病をくありあまをくしりて書こ

あいの清さぞ
秋
きよのささけ

あふとかなんせ
清見の夕

あたくしは、さういふ名
前坊のあんなりのあつて後々小
原あといは、遠縁つもの病よもうのまゝたうしてそそれゆへに
のすゑそのうしと皆うおなりそれを名とのとなりてと
えとてうやうは必定下りのうもこのまじい原と義経ある
所を去るとけねるあるやうはありするかと後悔のふう今
ち―めうの振ようかあげきぬと

舟文八

秘
秋好

ふてゝたりつ

必

私母市息而ゆゑなり

世に定まりたり今海定一とてこれとていふ

秘

私母市息例にばそのとていふなり

とてきとていふなり

私例なりとていふなり

いふなりとていふなり

何なりとていふなり

秘

必

公とていふなり

あつたりとていふなり

十なりとていふなり

秘

必

市麻とていふなり

ちやとていふなり

秘

長奉送使 天曆市時

必

中御とていふなり

必

延喜式云凡母日親王

云元之弁一人史一人六位已下友人一人

陣定市能大中御云各一人参後二人四位四人已上

参後各一人已上

今案群行日市能と勅使といふ

長奉送使ハ伊豫とていふなり

とていふなり

とていふなり

とていふなり

秘

院の市能とていふなり

相違帝市能とていふなり

まゐのつとていふなり

秘

つとていふなり

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

?

1

36

1

り

13

1

一

三

九

下



时加

五

92

七

師



不審ふりり幼稚といひあう今廿六十二也日興の年
いづとそとゆり但諸おびけはよ及たふなり
同興のより道遠と不審

ふおとれうりあきなり

新 清見町の又たかれす 秘日

秘 びんとい名のとこいゆり 秘とこいゆをよりし廿六日同興あう
日よあうりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
世継之忠平れおとりの女前坊の清見はあうおいせ 秘
雨後ときりわたりぬぬり 秘とこいゆをよりし

十六めとこいふ

清見町の氣付へなり

大よりそとれゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

秘 年紀のゆりゆり

必 年紀とらんゆりゆり清見は十六とあうゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
とあゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

とゆりゆり保明ちま小一乗庵あこれ例あり 秘日
玄家末歳始遷入之時十六今六十 栗府上陽

清見町の

秘 清見町のゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

秘 今日ハ從ふゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

或抄清見はそれゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

父おとれとゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

物一ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

いまゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

みゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

西坊城より入り八省にある友麻西より寺樂院より大中和院より出車八省の東路より多々行くなり

三ノ下

秘
市見取のしこめ女房よりのついか

江戶人々々々

くらゝ

[illegible]

二葉よりぞうたんのあゆら

五
之
柔
院
の
そ
を
れ
ず
あ
る

ばち路のうゝ花鳥より——昇日

一 昇日

必
由王桑輿出昭訓門至八省東路南行至郁芳門路東折至義

福門南行，即出東掖門，經二條大路，東行至京極，
洞院大路。

西田院と東田院とをいふ一文字をたゞあるに過ぎぬ

をりぬき本をよきとせりよき本をよきとせり

象極の象五下向ハ二象の左路よりト東洞臨クおれり

2
 下向ふてきたり

舟文下向予一動ヤリリあれハ一代の内も又えうりり終るまじ

ははの母よりとくハ式部
言ふれ女帝の所おとくしとの申
れえそお

ちます。帝ハウツセリ。ト
母院よハお前村との十人
あり

子曰親父母不欺瞞
私勸之采花中之

所本心一

西宮の舟院より

いさの海子
いさの海子に濱よひろくありて
なほうゝあかきものなりけり

ゆりすそくきふハゆくとも正しく何屋その波に神がきくや

公侯よりいふに、
「あつたやうな御
座り。」

是下此句之面並く川八十瀬とてあることより川ありと

[illegible]

中里人地として
 鈴鹿川伊勢
 鈴鹿郡に在りて

とめ阿まごより

少海見名此也子海多此也文よりあり

又甲寅の辰の文あり

少

八十歳の彼よりいそいそと歩みふりかへていきました。

如くしてハ如くせよ如く汝を如くあり

やうしとやうきととていかにいふ人かむじとてうらふふを

すゝ川やせのうねと皆人のあつゝしきる——けふあふ

あゝあゝ

俛了乐

もく川八十歳よりと伝ふよまうくようい書いあ
ことおきつく 秘 旅れ中へあれに津島市のおまふいことおきつく

あかつくとわいおれよりもういあかたりのお約とそ
りともうらん又旅れ中へいおれよりおれよりおれより

小蛇風ははち所のいおれよりおれよりおれより
ことおきつくことおきつくことおきつくことおきつく

やうたりの西新はふおれよりおれよりおれより
秘 小島市のおまふいおれよりおれよりおれより

おれよりおれよりおれよりおれよりおれより
おれよりおれよりおれよりおれよりおれより

おれよりおれよりおれよりおれよりおれより
秘 おれよりおれよりおれよりおれよりおれより

おれよりおれよりおれよりおれよりおれより
秘 おれよりおれよりおれよりおれよりおれより

おれよりおれよりおれよりおれよりおれより
おれよりおれよりおれよりおれよりおれより

おれよりおれよりおれよりおれよりおれより
おれよりおれよりおれよりおれよりおれより

おれよりおれよりおれよりおれよりおれより
おれよりおれよりおれよりおれよりおれより

おれよりおれよりおれよりおれよりおれより
おれよりおれよりおれよりおれよりおれより

おれよりおれよりおれよりおれよりおれより
おれよりおれよりおれよりおれよりおれより

おれよりおれよりおれよりおれよりおれより
おれよりおれよりおれよりおれよりおれより

おれよりおれよりおれよりおれよりおれより
おれよりおれよりおれよりおれよりおれより

おれよりおれよりおれよりおれよりおれより
おれよりおれよりおれよりおれよりおれより

冷泉

東坡冷泉

問之 非記正文取意

虎

身之

秘
方

57

相帝

秘
延壽

私冷

物とる

原

冷泉

書文

7

五
八

要入

秘
古
石

月

2

如令

七

彛
秘
曰

31

尋常大長仙を改むる友とていふ例之を爲すに又ふかちむと

二条右大臣如左殿大書裁川入大書之夢日記
二月右大臣友原基

[illegible]

和久は物類ハ米菴漢惠帝ニ似たりと云ふ弘キ所也右氏
 呂氏名ニ似たりと云ふ惠帝ニ似たりと云ふ
 人ニ似たりと云ふ弱ありと云ふ米菴此ハ公仁弱ナ
 所ありと云ふ可也本紀

後世之君子也

日下紀

孝子孝養此子

孝子

とりあ

有りあつて
 源ハれ子ふられ中よ正之れちぢ五つ
 程ヨりあつて又あつて孝一ゆふと人々衆と足合ひつて

左に示す

和名 縷衣

前衣ハ服者の足廻に
中衣ハ前衣に被る

とろろ布 糸服よ布と判はてそこ ひとハ 日易月とそ

十二日 呂氏——令脱御之。又載麻之。麻布之。用不。

此名より忌衣と佛の御服と
凶史云仁明天皇養和七

年九月癸未後上天下品于淳和院天皇除素服暑堅綰御

冠橡漆衣以臨期御簾及屏風綠并用墨染細布

あそびと

去年ハ榮上ル今更ニ榮ル
祝日

すゑに

^勢
 東上
 夕
 未
 此
 子
 乙
 紐
 日

鈕
日

秘
圖

世のうねりよんふく
てやうな

丙午九月
 女清之
 正家
 多
 皆
 此
 一
 清
 之
 人
 乃
 乃

桐亭先生院

七条の巻うせりひよけの境よくゆるくる

伊勢
古鏡
古

浪を此に
とてさるゝ
まの月
袂のり
みちとく
こころ
あふく

三山居士

私は今とあるの事なり哉ん

うれはあつといふおれ

とつせのふあ

ゆりあふとつり

あつといふあ

中まのゆりあふ今とつりあふ

ゆりあふ今とつりあふ今とつりあふ

ゆりあふ今とつりあふ今とつりあふ

ちりあふ今とつりあふ

ちりあふ今とつりあふ

ちりあふ今とつりあふ

相席の位とちりあふ今とつりあふ

相席の位とちりあふ今とつりあふ

相席の位とちりあふ今とつりあふ

相席の位とちりあふ今とつりあふ

門前零落鞍馬稀

相席の位とちりあふ今とつりあふ

二条院の事

殿と宿直人の名字ちりあふ今とつりあふ

一説云一年中れりあふ今とつりあふ

大書あふ今とつりあふ今とつりあふ

今とつりあふ今とつりあふ今とつりあふ

今とつりあふ今とつりあふ今とつりあふ

今とつりあふ今とつりあふ今とつりあふ

今とつりあふ今とつりあふ今とつりあふ

今とつりあふ今とつりあふ今とつりあふ

今とつりあふ今とつりあふ今とつりあふ

院の事

院の事今とつりあふ今とつりあふ

院の事今とつりあふ今とつりあふ

院の事今とつりあふ今とつりあふ

院の事今とつりあふ今とつりあふ

院の事今とつりあふ今とつりあふ

三女 威子後二条之右宣平仁年 四女 嬉子後朱雀右之

秘 今一しの所おしあゆもうくまゆーよ入申例と

秘 日

大略室うらよかき 由と自他れ所つりのよ、梅屋と月夜
なりさるかきよ弘徽女よいばあゆうと信のて
とくうとあれむりれありのけり

梅屋 弘徽殿 登花殿 已上右町西女所ホ曹司也

公 登必る弘徽女れ小梅屋い登必るれあよあ何まを皆近
取舎とむりれありといば年月人とな信磨よむりれあり
秘 登必る弘徽女より興とむりれありよとば弘徽女いり信た
内と必る登よむりれありあきとありあきりあきあきり
秘 朧月の登必るあいせー弘徽女よ移り移り
中 朧の奥の登必るあよ信移りーとれくーとく弘
あき移り信のーとをのそくろー
秘 所おれうらよいのわあり
ありのわよりーとくろーとれくーとくろー

秘 氏密通れり 秘 日

中 御と君とり女房公よりれーまよんてー

秘 ねのあき 秘 原の如き 秘 今いああわーりれあいうーとあり移り

今ーとあきーとくろーとくろー 原の信よりとあき移り

秘 院のかりーとくろーとくろー 秘 桐葉帝れありーとくろー

秘 庭のかりーとくろーとくろー 秘 今いああわーりれあいうーとあり移り

秘 庭のかりーとくろーとくろー 秘 今いああわーりれあいうーとあり移り

秘 庭のかりーとくろーとくろー 秘 今いああわーりれあいうーとあり移り

秘 庭のかりーとくろーとくろー 秘 今いああわーりれあいうーとあり移り

秘 庭のかりーとくろーとくろー 秘 今いああわーりれあいうーとあり移り

秘 庭のかりーとくろーとくろー 秘 今いああわーりれあいうーとあり移り

秘 庭のかりーとくろーとくろー 秘 今いああわーりれあいうーとあり移り

秘 庭のかりーとくろーとくろー 秘 今いああわーりれあいうーとあり移り

秘 庭のかりーとくろーとくろー 秘 今いああわーりれあいうーとあり移り

秘 庭のかりーとくろーとくろー 秘 今いああわーりれあいうーとあり移り

秘 庭のかりーとくろーとくろー 秘 今いああわーりれあいうーとあり移り

わらうとありとちたのちのりなり

ちねいなりしよかりに 秘 原はたきの方へ一服とさうくく

さうのり 秘 夢との女房をさ

いづいなり 秘 ちたき一服と原といふなり

さうなり 秘 原氏と元のさなり 時れなり

秘 放院れに世に出は 秘 ちたきとさくくくふくくは原なり

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

さくく 秘 ちたきとさくくくくくくくくくく

中ねよおとつれ

秘 権のつらひめい女房

そひーにうり

秘 原のふし成のわいせね後うりめい

みーい成のわいせん

史記云孝惠為人仁弱也

秘

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

朱雀の原のわいせん

あつたに—とこれの—とつねとあつたふなり

14 ちね夜なり

15 同士の井戸時や—の井戸の時

ちね夜なり—の井戸の時—の中—と首をたつ—の時なり

くう—のちね夜なり—の時なり

井戸のか—はわ—のちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

ちね夜なり—の時なり

腫月夜
れせしとのそめぬん ね必る西文山ホノそ男と

わくとそしつるそめぬんそめぬんそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬんそめぬんそめぬん

唯今とつるそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬんそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬんそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬんそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬんそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬんそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬんそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬんそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬんそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬんそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬんそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬんそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬんそめぬんそめぬん

とつるそめぬんそめぬんそめぬんそめぬん

私をいふよーとれたやりのやーとわりあへーとさういふを
とやういふさうーのりれあへーとと原を知りあへーとは腹がめ
口はあへるん 秘 花つたさういふよとわつた

あまをさうさうさうと 秘 花つたのいふ
あま坊い大い表れさういふと
少くも師公の 秘 花つたのいふと

いささささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと

いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと

いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと

いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと

いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと

いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと

いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと

いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと

いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと
いさささささささ 秘 花つたのいふと

ばあゝ氣ぬるゝうーおきうー

いそいそ 海のさうぢうなり

市氣河のうー

爺よくわいゝあまねおはくのものとい

はくものうーあまねおはくものうー

ておきなり

市氣河のうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

こりりぬきうー

海のうー

つかさ知りぬきうー

あまねのうー

海のえきうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

あまねのうー

おのえ路の所 葉とよの葉はよく似てゐる

わろのなるけね 葉とよとんてねあつかねあつてふねに

あつてふねとていふねのふね

ねとふねとていふねとていふねとていふねとていふねと

やろのなるけね

おのえ路の所 葉とよの葉はよく似てゐる

わろのなるけね 葉とよとんてねあつかねあつてふねに

あつてふねとていふねのふね

ねとふねとていふねとていふねとていふねとていふねと

やろのなるけね

おのえ路の所 葉とよの葉はよく似てゐる

わろのなるけね 葉とよとんてねあつかねあつてふねに

あつてふねとていふねのふね

ねとふねとていふねとていふねとていふねとていふねと

やろのなるけね

おのえ路の所 葉とよの葉はよく似てゐる

わろのなるけね 葉とよとんてねあつかねあつてふねに

あつてふねとていふねのふね

ねとふねとていふねとていふねとていふねとていふねと

やろのなるけね

おのえ路の所 葉とよの葉はよく似てゐる

わろのなるけね 葉とよとんてねあつかねあつてふねに

あつてふねとていふねのふね

ねとふねとていふねとていふねとていふねとていふねと

やろのなるけね

おのえ路の所 葉とよの葉はよく似てゐる

わろのなるけね 葉とよとんてねあつかねあつてふねに

あつてふねとていふねのふね

ねとふねとていふねとていふねとていふねとていふねと

やろのなるけね

そなたとてうりふたふたの世は叶と名へてやあや
世なり——にとてとて

あつたはの弱れつてはくもつてらるるてあまのわ——にとてと

私に原のふいふあはれ——あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

なりは世の恨とてくはあ——てとてのふとわてとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

あつたはれは——にとてと

史記云呂后死戚夫人其子趙王因戚夫人斷手足去眼燂耳
飲瘡菜建居廁中余曰人彘少兒少んぬれ根糸といふれぬと
少兒少んぬれ根糸といふれぬと少兒といふと凡ば物終に呂后を

帝なりとのみとてさうさうをりぬおほ

ういふあんこは 必 有つた物家よりなる

長えんあさうとて 有るはさうとてぬうぬとぬあを

いまういふとてさうとておほ正

市とてういふとてさうとて 必 有る中えれは後よりとあり

ありにういふとてさうとて

公王のういふとて 有るの中えれは後よりとあり

えいといふとて 必 有るの中えれは後よりとあり

私えの中えとてさうとて 有るの中えとてさうとて

てといふとてさうとてさうとて

いの中えれは公王とてさうとて中えとてさうとて

ありとてさうとて 有るの中えれは公王とてさうとて

又門裏とてさうとてさうとて

とてさうとてさうとてさうとて

えれはあめと 必 有る冷泉地 有る海島に趙王に徳を

とてさうとてさうとてさうとて

とてさうとてさうとてさうとて

とてさうとてさうとてさうとて

とてさうとてさうとてさうとて

とてさうとてさうとてさうとて

とてさうとてさうとてさうとて

とてさうとてさうとてさうとて

とてさうとてさうとてさうとて

とてさうとてさうとてさうとて

とてさうとてさうとてさうとて

とてさうとてさうとてさうとて

とてさうとてさうとてさうとて

とてさうとてさうとてさうとて

ふふあふふあふ

着座の所を要するといふをあくか

一 肉をとお肉をぬくなり

そ
れ
お
い
く

あつたに付て、うゑをぬくことゝする。

たふさくはな

かゝるなりとみしる

武平二年よりその前迄

うゑをそくする

五

夜居僧
二回護僧乙

日裏に二回より三回まで取りとけつたもの便に

五ノ下ニ

氣滯のんりて
破るるを云ふ

すめちく

秘
長文なり

久々お宝殿

吾友北師

あかひのふかき

秘傳
原由
の
事

かきまへん

さあ、うしろの櫓ありとあり

故きまゝとふ

女メのくちのふり

吾妻文此所てあること

とくしちちめ

よく書よ 何うするに玉のきんた

おのろちりよく
ぬくろくろく
にやんとも
めえと

うんとするに
あつた

世がうらやまをいふはうらやまありあり
すきまに

大徳の君と云ふ
 九條 友成公と云ふ
 史記の書と云ふ

武松者蓬中父也

私言者不此義經乎

あまもきふのやと

秘
者盡よるにせむ人の心

雲林院よりてあり

淳和の雛文 見込
くまの地を踏み

三光院自筆之被印如早

魂戒

仁明

文德

淳和

光孝

良峯出也

編照

常康

宜也上人

秘

河海序雲林院の浮和の難多と云ふ了る藝の雲林院白毫院の南
小北院の藝の西に宇治の室庭の日記の由と云ふ此に雲林院を
よりみたりと云ふ云ふとありて云ふ云ふなり

俺人のうけと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
と通明のようなりと云ふなり

雲林院のうけと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

雲林院の浮和の難多と云ふ了る藝の雲林院白毫院の南
傳領本堂の彼親王の室庭の日記の由と云ふ此に雲林院を
記す云ふは補せし後なりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
子子親王有靈蹟と云ふ謙徳公康保元年二月廿二日補雲林院を
當于時冬候に位下小右記云定覚阿闍梨年未嘗居雲林
院云馬七の正月八日於雲林院令持大般若又康保四年六月
十四日始に今日於真言院東寺雲林院蓮花座を實相菩薩仁
王陀羅尼九日竟之為具哭なりとあり

必 国史云云九年四月分國書寫る幸は京野山法為善院司執命

陪從文人賤侍所制和成賜祿百着新撰院名為雲林亭
兼和十一年八月癸巳幸北野駐蹕於雲林院田覽池塘賜宴
群臣日暮還宮 元長八年九月十日丁卯權僧正法下大
和尚位遍昭奏言雲林院者故無品常康親王之旧宅也親王
出家為沙門貞觀十一年二月十六日以此院付属遍昭曰深
草天皇給此居之後天皇登遐常康落髮昊天因極德猶難報
恩於永賜年分度者三人傳天台之法門試度之道清以為慶
寺別院成親王之心於金院中雜更擇遍昭門徒中堪幹更者
令其勾當 勅依請聽之

右の如く云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ

秘 相産文衣れおとついで 寺日

秋の如く云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ

秘 秋の如く云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ

うん云々云々

おついで云々云々 表端云々

右の如く云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ
私云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
私云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

私痛きなりとせせくすのしよつせくねたよ由全し
しよ又わくねたわくねたのしよ

秘史中川分目

天のたふし
私者つかれぬなりとせせくすのしよ
世のたふし
月と花のすのたふし
かきとあり

兼のたふし
おまふし
こまふし
さふし
律作れし

相更衣れ兄原のたふし
秘史中川分目

なまふし
先娘君の
しらふし
まふし
一かおふし

あふし
あふし
あふし
あふし
あふし

あふし
あふし
あふし
あふし
あふし

あふし
あふし
あふし
あふし
あふし

あふし
あふし
あふし
あふし
あふし

あふし
あふし
あふし
あふし
あふし

うらむきこり奇よて面白く一糸成よりと東の虎へ寄る
清分れらるる原のまの公あねと嵐よりとせより

清分れらるゝ原のまの公あはて風よりよせり

海の幸の公ありに嵐よよせとくあり或は前此面と下れ
 公世中よりくくありのや雲方此嵐といふり海とく
 此よりくく多きあり

まゝあぬかりありてゆくゝあり
中々とりあつる一際虎赤

中一交とリきりつりり一際虎帝欲
海芽とれ海のやとりに君とてたて磨と出

秘磨とあめりといふ磨とていふ人
 此磨と出りて又秘磨あめりといふ人
 風吹くよりおちいそくばおれぬとあり

女君之

東上あり

風

つひにまゐる所へ又つゝの儀並に法^{あり}より如く守るべき

女君はあふふと淫笑はさしめ、ふと人々を誘ひ

あふりりれかまの月より

或我は是の嵐と移る世とれなげ——
 阿くとく多うりといふうの
 所感物となす我の多うり
 浅芽は露日ゆりくるもの
 うりしをといふ因所説もく

御子におはる

是より案とれぬのうをばあか

あかひんふり

七

海の子の心魂の何ぞ

おほふり

海一ちいさくうると海の色

吹く風をちかきとなく無垢よと実然たり

橋舟に坐し、くわの舟に乗り、ちりきとりのなり

雲林此楷 秋波之暖 晨らり哉 是よりある所あり

[illegible]

中松の君

おとうと母の女房へ

く搦の穴よ

是よりハ中ねの君への文に知る

かみ

舟渡人の又よどり

原

うきまういーこりれとそれこの秋ありわゆるゆふあきまうの
ゆふあきまうといふ秋とそれはすうとる 四の季を記云い天の具
山之天日羅懸なるは 右拾遺云以羅葛なるは 懸とそを
秋院よ様よりー時の秋と

秘

秋院ありあきまうとそれとてうきまうとてうきまうとてうきまうと

秘

秋ありあきまうといふ秋とそれはすうとる 四の季を記云い天の具

ひ

秋ありあきまうといふ秋とそれはすうとる 四の季を記云い天の具

秘

秋ありあきまうといふ秋とそれはすうとる 四の季を記云い天の具

秘

秋ありあきまうといふ秋とそれはすうとる 四の季を記云い天の具

ひ

秋ありあきまうといふ秋とそれはすうとる 四の季を記云い天の具

ひ

秋ありあきまうといふ秋とそれはすうとる 四の季を記云い天の具

ひ

秋ありあきまうといふ秋とそれはすうとる 四の季を記云い天の具

ひ

秋ありあきまうといふ秋とそれはすうとる 四の季を記云い天の具

ひ

秋ありあきまうといふ秋とそれはすうとる 四の季を記云い天の具

秘

秋ありあきまうといふ秋とそれはすうとる 四の季を記云い天の具

秘

秋ありあきまうといふ秋とそれはすうとる 四の季を記云い天の具

ひ

秋ありあきまうといふ秋とそれはすうとる 四の季を記云い天の具

ひ

秋ありあきまうといふ秋とそれはすうとる 四の季を記云い天の具

秘 我れが女れはうらとつり夕魚よまらるー けりね
くかたきとせしりき日 我れの所我れとるやうにけり

あつても我れとよりけりー けりね 我れとるやうにけり
多端にけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

あつても我れとよりけりー けりね 我れとるやうにけり
これけりー 秘 我れとよりけりけりけりけりけりけり

我れのまけりけりけり 秘 我れとよりけりけりけりけりけり
又我れのまけりけりけりけりけりけりけりけりけり

あつても我れとよりけりー 秘 我れとよりけりけりけりけり
のまけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

あつても我れとよりけりー 秘 我れとよりけりけりけりけり
あつても我れとよりけりけりけりけりけりけりけり

あつても我れとよりけりー 秘 我れとよりけりけりけりけり
あつても我れとよりけりけりけりけりけりけりけり

あつても我れとよりけりー 秘 我れとよりけりけりけりけり
あつても我れとよりけりけりけりけりけりけりけり

あつても我れとよりけりー 秘 我れとよりけりけりけりけり
あつても我れとよりけりけりけりけりけりけりけり

あつても我れとよりけりー 秘 我れとよりけりけりけりけり
あつても我れとよりけりけりけりけりけりけりけり

あつても我れとよりけりー 秘 我れとよりけりけりけりけり
あつても我れとよりけりけりけりけりけりけりけり

あつても我れとよりけりー 秘 我れとよりけりけりけりけり
あつても我れとよりけりけりけりけりけりけりけり

あつても我れとよりけりー 秘 我れとよりけりけりけりけり
あつても我れとよりけりけりけりけりけりけりけり

あつても我れとよりけりー 秘 我れとよりけりけりけりけり
あつても我れとよりけりけりけりけりけりけりけり

おすゝめとていふも
文句十巻 止観十巻 天台大師作 是号之太部
中石記云近日至上學六十卷給一榮院令學び之十卷給例と

いふききりおこあひい
わうりぬふれと
とわうりききりあれとまのあひわうり
又あうりわうりあり

人目よりれいし
ふずきやう 市踊
あうりわうりあり

山うりわうりあり
これより
あうりわうりあり

あうりわうりあり
あうりわうりあり
あうりわうりあり

あうりわうりあり
あうりわうりあり
あうりわうりあり

あうりわうりあり
あうりわうりあり
あうりわうりあり

あうりわうりあり
あうりわうりあり
あうりわうりあり

あうりわうりあり
あうりわうりあり
あうりわうりあり

あうりわうりあり
あうりわうりあり
あうりわうりあり

あうりわうりあり
あうりわうりあり
あうりわうりあり

何うしてあんなに云々々々也 春日

あーれううぬ

秘 下の縁の色 川宮

下の縁の色 春日

それと縁うううと云々うう面 留まらぬ故に也衣錦夜行

うううと云々うう面 留まらぬ故に也衣錦夜行

あうううう

秘 下縁の色 春日

あうううう

あうううう 春日

あうううう

秘 下の縁の色 春日

あうううう 春日

あうううう

あうううう 春日

あうううう 春日

あうううう 春日

あうううう 春日

あうううう 春日

あうううう 春日

あうううう 春日

あうううう 春日

あうううう

秘 下の縁の色 春日

あうううう 春日

あうううう 春日

あうううう 春日

あうううう 春日

あうううう 春日

あうううう 春日

あうううう

あうううう 春日

あうううう 春日

あうううう 春日

あうううう

あうううう 春日

あうううう

あうううう 春日

あうううう 春日

あうううう

あうううう 春日

あうううう 春日

うんの君のうら

祇 市門の所を

臘月夜の原と密通のうらとありてねりううううある

とそうーあさむのこ帯れあさむあさむをあらわさず

もきれり

まふこのうと原式一四うて

はきく

数あるの奇ううう

秋文れうり

秋好中 文の伊勢へ下りて思ふ

朱権の後まて忘れううううううあり

ううううう

朱権のうううう

あさうううう

原うり

秋文れわうり

秋文のううと市門のううううう

秋文れわわ息あふりううううううううう

あさむううううううう

希一れわわ亮雲中ううううううううう

中文のううううう

祇 原の初中 文のあさううううううう

あさうううううううううううううううううううう

ううううううううううううううううううううう

さうううう

私文は美しき清極ううううううううううう

とゆれわわあううううううう

花のううう

原うあさううううううううううう

雨邊をわうりうううう

いとわううううううう

中文とあさううううううううううう

あさうううううううう

祇 市門の作

朱権花のううううううううううううううう

ううううううう

祇 原うあさううううううううううう

私文は美しき清極ううううううううううう

とゆれわわあううううううう

花のううう

原うあさううううううううううう

雨邊をわうりううううううううううう

いとわううううううう

あさううううううう

祇 市門の作

朱権花のううううううううううううううう

ううううううう

ありんきとちりつり中記よ、日如費日あし侍りちりつり
源氏つる金たぐれとあまよふせとみしとれあまよはるる
そよめあまきんとちりつりつり又内様のみとあつるよ、虹と
蟬礼よたどるるも待りとるるはあまよふ源氏内侍
よかつる人よとちりつりつりつりつりつりつりつりつり
双弁のまじりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
きこくつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
又つりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
武振神統よとつりつりつりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
びつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

きこくつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
かきつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

きこくつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

つりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

おきこくつりつりつりつりつりつりつりつりつり

いふ人よわりつりつりつりつりつりつりつりつり
とまりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

月めつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

夜のつりつりつりつりつりつりつりつりつり

れつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

それ感よりつりつりつりつりつりつりつりつり

おきつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

つりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

ちつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

おきつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

或おきつりつりつりつりつりつりつりつりつり

下よおきつりつりつりつりつりつりつりつりつり

おきつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

わの初と夢し人を夢さつるをばおれとてはたみくといひそめり
月夜説おれ初よあやうきめうらあうらうりきりあや
うあうとて昔をちりいそへ今初うは月とちりあう
今宵はあうとて夢をみそりやあや夢やをみらんとも
ほろとて夢をみそりいそへあや夢はあうとていひそめり

月ひかりにけりし月の光をいりよつとてとれとほめ渾の落を
 ぬくはあのおとけと下をい渾の公卿のくさる

是
 ば此の面の中へこれの面をうけとる月のあるところより下へは
 海の下へより中へこれの面をうけとるよりより

私をばあがりくハ月のみ又朱薩比世よりくつるハ事せんち
りら夫れた者なりとも勢よりくくハ力ハ叔下ハ後つ不れん
少面ハくくハ下ハ故蓮やうくひりて

虎しんのとろろ
弄秘よ川おちあ

15
 空ろくろふけむをてれか衆と人のこころありきり
 衆と人のこころありきりとてれこころよ衆も衆ありきり

文ハ中ニ至ル

うろのうろ
何と云ふか

あゝ ちかり 進うぬと
ぬま といふ けふや夜

[illegible]

まゐいとちかよりと
東文也常々く山霞ありと

いふ
中
文の
出
る
ま
で
い
ち
ど
ろ
の
こ
ろ
中
文
の
ま
ま

とふゆゑに「おれはな」をわかれの歌である

うき世にけよおろ
後世にけよおろ

あはれと見ゆり
あふしのふに

ちねん弁せし
ほのゑと虹田とほろぬきと云ふ

人の君ありて
うろのてきく勝て
之の言をき

ちんちんをいふ
 又は所か膨の方より尿へ蓄積あり

勝月夜

大にれうよりけりまうにわがやうとよう

海の玄をてこくしむせいの

ふーくふの音にもあぐくふの紫のふふとふたのふふ

私にば必す此義いと学ぶ也又

源のろりやりと

唐紙

每回

秘
ほのめく

2

昇秘川名古

秘

紙

6

ちうにこれ様のまゝいふよりと云はん正しくはなし
或は御説同く
私をわいしむるも此のつら比とい世によりていつく遊んでたま
はるゝ此のつらとい此のつらとい中々極楽のこともいふ
ばぬ海ありやれども時宜様あれはたゞそれなりとの所歟とや
西院さんと候へりたり人——あひんこそか遊んで居ても
おれが——なほいはいよあるめれたるを相尋——候ん

我をいつのようであつたかといふと、
 元をたどりしむるわづらひもそれなり
 くりりいゝ涙の裏とてきりきり
 公とていゝ涙の裏とてきりきり
 地とていゝ

人より公はさういふようぢやあをたもてともしまう所
 君よりいふ公の元へようりもさうゆりきぬれあらん
 今案するめは時ぬよそくゆり公の海へゆくはぬきりす
 必るよ川があ育るにば行なれおひさうらん
 人より公はさういふ——
 但う及川かな　中書月

いゝあめく
物とて

秘
川がまきう末動れまゐるといふこと
秘
うんまきうの句と

こまゝのなりにて
ふにちて

えうちうてうたりと好まぬ
 ばんね君のおうとてうてうて

わづらひしき

多うく——エ、れ、と、う、ち、す、と、く、終、り、と
原、の、内、を、之、を、め、お、り、の、故、と、 安、第、子、化

地
 の
 師
 を
 ぞ

秘相帝一國忌あり

有^八通
如^心
此^心
以^心
公^心
羊^心

中
交れくらとふくみんかーじ

芝ハ赤虎の御幼子ト云ハ其ノ所ニ有ルハ
此ノ所ニ有ルハ

雲月此朝日は清くうなるに

有虎園虎 虎園虎 虎園虎

沛公忘持統天皇之年役國齊於京師諸寺
 昔ハ一ヶ玉ツ山陵へ成字ありて目ハ一玉ツりぬあり廟をぬ
 けり清和天皇の毀廟とて前れとて清和よりあり

文永三

中交なり

ふしめいふくろとあまのよけわすをといはとあのみん

秘
中三日之薪以行乃見

秘
弘微
乃てりやと云ふ事ありき

私をこれとある所の金うたれハ世とてうに
殿とく皆あつた

あまてふふたより

冬日已探薪及菓蔬隨時恭敬與法苑珠林云

法必^格源と成^成り
子ハ菊と^子り菜摘^子有^子る
て凡^子々

和は齊と協陀市にて行なふと

大徳くわん
のらうけ
持たなり

に伊勢物語の如くみづくをくぐりておちてきりその所の

女御ありきとて
みまゝにうりきり
せ給ふ安祥寺あり

いそぐきりくまろあひるゆきさけはうゑをこげ

さうとゆへを本に校よつてよく當れするよあつてふいふと云ふよ

常此よりよくいふにやうにあらんことを

或所御
税より
枝とる
金銀の
より枝
より種
より枝
より枝
より枝

私を市八海の時終に持ぬと云ひく持てけりて止る有り

八海の作法なり

ふふあふれ

秘
男子地

八海子
西文抄子

火のうやまうりかひあり常ふくしあり

うふふいふあつ——かんと剣をつふなり

大それた目くらま
 中目くらま
 秘 毒出衆のり

中^秘文^秘北^秘江^秘親^秘の^秘類^秘は^秘駁^秘之^秘の^秘と^秘書^秘曰^秘

公使よりおとりを返す

よくそのをばりしものなり

いふやうなふたつに
受戒のふたつ

の終りと云々（小倉に受戒より）
（下）と云々（終り）

市
 中^秘文^秘は^秘あ^秘ら^秘に^秘尋^秘日^秘
 市母^秘と^秘と^秘

是といふうな者
弟兄の号々々々

前代より多し
 相帝にのみ

中受ては服はあつてゐたが

[illegible][illegible]

五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

今更く世に
別れん人
合ふ人
合ふ人
合ふ人

んこちといふ路ゆり 中庭のみとてうられとわい路ゆりといふ
ゆつといふと又中庭の市見あると云ふ

私は中庭と云ふといふことあると云ふ人のありとていふ人一人は
あると云ふと云ふ人のありとて路と云ふなり

さうく人ありとて ちねりさぬとてなりとていふ人
いふと云ふなりとて ^秘 ちねの宛

私は中庭と云ふ人のこととていふ人一人はとていふ人の宛は
いまは中庭と云ふ人の宛はとて ^秘 中庭と云ふ人の宛はとて

私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて
私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて

私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて
私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて

私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて
私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて

私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて
私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて

私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて
私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて

私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて
私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて

私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて
私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて

私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて
私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて

私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて
私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて

私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて
私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて

私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて
私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて

私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて
私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて

私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて
私は中庭と云ふ人の宛はとていふ人一人はとていふ人の宛はとて

松
 うきうき
 やとり
 うきうき
 ありあり
 ありあり
 ありあり

おちりしのおきこむるうへありととわりとちりこくき
こぬとこ中へぬぬるうへととわりとちりこくき

下り終つては、片上りさうさうき

秘
原の公に
終るに
いふあり
きとなり

あつちきこへ
あつちきこへ

あまのなかり

うろたへてゐる

とうとうめい
 必 原休言となりめと 勢

五
 豫宮よりくみわたりしきよの姫と

にきりふやういふんたう
に寛者唐太宗之旧風也

漢書王吉仁之年幸神象苑覽必樹舍文人賦詩是始也

延嘉二年正月廿日御記云在大中令著根朝中先朝雖清

僊寢至有門裏多用仁壽殿此度門裏可仁壽殿行至苑人武

清冷殿記亦廿日廿一二三日之間若有子日使用定亦

二日差人及所司於東仁壽殿新儀式云正月廿日內宴宴前

一日苑人所新色以下并所司裝束仁杏殿木工寮立舞臺东

卷二 使 人於親王 示明日可集之狀 又 人於奉作令

仰可系文人士商日卿仁壽殿蹈舞之事在初子寒

市とあいめやう
菰中

ひのうかりす

つゝのあつたんをたう
おれをこ
是いふよりうーなれ

とよあくらにふりそよふ

より
わきへつり
あひ
ふれど
あひの
おの
ふり
あふ

ちね系り終り

所の黄蘗れかりに系り終り

[illegible]

文同うゝいふは若しハ義に屈せしめん

あをるりそは川之ぬ
ゆる節念の日事又各々ありと

之義ありぬるべしなりハヒと云ふ事なり

以
十
年
之
云
月
亡
回
看
白
了
今
性
以
白
為
本
天
有
白
然
地
有
白

是回見白昂年中氣衰去不來也皇世記云昂年

子以正月七日恒臺東山圖命青衣人令司書了七正調青陽
之氣了者主陽臺山圖者万物之始人主之居七曜之清微陽
氣之溫始也
寶龜六年正月七日天皇帝楊梅院安殿穀

寶龜六年正月七日天皇所楊梅陀安殿設

宴於五位已上既而内既宴進青御子矣郊有急五位已上裝
了中^ツ和^ニ之石上^ニ朝^テ令^テ色^テ就^ニ飯^ニ位^ニ宣^ニ令^ニ其^ニ和^ニ曰^ニ令^ニ詔^ニ今^ニ日^ニ正^ニ月^ニ七^ニ
日^ニ亮^ニ明^ニ食^ニ日^ニ尔^ニ在^ニ是^ニ以^ニ罷^ニ尔^ニ登^ニ遊^ニ止^ニ青^ニ子^ニ見^ニ吾^ニ未^ニ退^ニ止^ニ

吾歟
天末

退心

康和元年正月七日天皇幸東殿覽音_フ助陽氣_ヲ心衰中
 覽白馬_ノ變
 貞觀十四年正月七日無節令去九月太老崩

貞觀十四年正月七日
玄節令去九月太老崩

心裏中也召左右馬寮侍了於內殿前覽觀人不蒙求

白子審中文意
權記云白子同審中文
給酒祿與寮官

子下五九

紅
と糸文よりほくこ
のゆねよりと

むづいぬおかいよ

糸
大坂二条のちりねり二条より

いふいとけをふのみゆゑ——
一はたぬともありてぬん

千人所食之食也

秘
傳のし出りりるふかまこと二人あひと

多きなり

あいたく涙くまふ

感一二語

由らといとわあらはなの

平のまなり

みまのちいねお下め

麓のありに花の里はるゝ笑のうたを

又子正の有りたる父よりては、此の事ハ父よりては

うゑのころはきりいたる所ありけり

すめいろうたう ちゅう せうらなう へん へん

ちひさな心あらずに

私に此のうきとみそくたの
秘を

五十二
ふふはこかりそふりうとらひぬるをとりてふふは

うしろいばうを氷なりと八雲のわたりなりと佐の桶の

正よりそのひの斎と入りを

新の帝

岸容迴
艣舒
柳山意
徑寒欲

發梅 杜子次 柳ハ非情^うと^く去^ると^と公^{あり}風^は情^を氣^を

乃有小人柳と以漢文帝中蔣人柳一日二卧三起已云

ひふふふふふ

わきとくろん

[illegible]

川宮媛撰

和言ハ川を浚掘十畝難クナリ

利者有 西院の者おらん ありき此終るをこなり此終け

かろく

今れ原といひりありと

まをかりしつらき

おのふなりゆきぬふふふふふ

やうやうかりしつらき

のふかりし

おのれ原といひりありと

いふふふふふの原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

おのれ原といひりありと

五十六卷之七

延治八年二月九日庚戌清記云大か陰氏了大補大を若乃
おれ言致は表依清符之

弘安源氏論云 十六番

尤 具致和卡

回云云案院よおきく准授の人かり 致はのわくこれの
人よあきく下りる

右 駕方

若云致はの准授の例いふは定めく 但先源氏之明
ふよ准せはこ時の致はとく准をへん致はあつて
かりいふ人へりく 定くゆんとかりあきく同よつて
致はをいふ 一ゆり 龍源天皇の所附致はは世こふとらふ
尤又申

由ににばる致はとむのときへ ちくは清信公のい例ふ
かりゆり員信公子清信公に致はのかくも致をす
ふとそくしるは公家のあきく明くは代民といふは員信公
のあきけりそのとあき版のし清信公のあき子家のあき
義人のあきあきいよあきあきくしるあき入内のみあき梅若
府為義公あき昇をあき 起る并あき右大并とゆく
近おの位よのかり西文大書とわいあきゆりも源氏り
よりくもゆり但致はのしとむのしと准をへんは清信公
天祿之年ふ月よ致政よりあき龍をへんははは義お遠を
しはをあきくしる朱薩院の論云よ同きん

右又申

清信公と准をへりあきあきくしるあきあきくしる
致はあきくしるあきく ばかたふりあきあきくしるあき
あきくしるあきく准授のしとむのしと定くしるあきくしるあき
あきくしるあきくは義載りあきあきくしるあきくしるあき
あきくしるあきくは致はのあきくは致を致を致と弘安源氏
論云よいつのあきくは致のあきくしるあきくしるあきく
あきくしるあきくは致のあきくしるあきくしるあきくしるあきく
あきくしるあきくは致のあきくしるあきくしるあきくしるあきく

致政を致大書 致はを致大書 弘安源氏論云よいつの致はを
致政を致大書

蒼上の兄、蒼のうら、蒼よを政大、
何のし原氏よりなり、い

なりきるものゝゆゑと云ふべきなり

可安在古訓云

又義不而也 前頃より而ば是れ也

友を稱するに表とあるは

時ハ表と裏とありては時と度とありて終る

いふひなまゝに

世のちり

子とハハとハハと

こよあーずりく

二億中ねあとも

なとちりろ

必
夢
の兄なり

なとちりろ

先づき一き右集

秘 顔やまの

それたのく

作ふこの人なり

あといと大まかに

殿と人の儒子よりけさうなわし

大まかに儒と地とよあかり

うぬよりいこいり

秘 對をよあかり

たあよりいれれをぬきよりてつぐ

仙居云狗取ん

葉細をえ細かるといつたういふてんこいりの方とあ

ねえとええとあといふりいふ痛たあよりいりあそをえ

のひあたりいふた二人つてゆせといふつとあやういふ

たうい

九一三五六七九

かくれ

九一四五六七九

右二四六八十

右二七七八九

これあんの字

秘 顔やまの

けいけいれれいふいふいふいふいふ

秘 顔やまの

秘 顔やまの

けいけいれれいふいふいふいふいふ

秘 顔やまの

右二四六八十

秘 顔やまの

まげい

秘 顔やまの

うけあるといふ

秘 顔やまの

ちいれいといふ

秘 顔やまの

階底藩蔽入甚用

秘 顔やまの

中將のひま

秘 顔やまの

殿とあつたれい

秘 顔やまの

四の君よりいふ

秘 顔やまの

うけあるといふ

秘 顔やまの

うけあるといふ

秘 顔やまの

あつたれいといふ

あつたれいといふ

あつたれいといふ

あつたれいといふ

あつたれいといふ

まゝなりうらなれ
くまのゑしひを

此是八原氏君也

銀
何の
海

秘
 びり 穀のむ 虫衣と 子うん 所

何事ぞとていふなりといふはれとあれの重なるを
 こころのあつたきさうなつたつたつたと云ふと云ふと重なるを
 あまう物と云ふのをいふことゝ思ふ

永年所記

紀
之、然て候のまばらハ、未の紀

あさゆりふ時花よあつりふふゆりとをちるうゝふなり

るるにあらん

武松云誰從之武松曰衆の爲にゆ

しをかしむるをさゆりなれとちうりなむの字をまゝこつひしと
てぬよえれ字の所沸やうきとけりせらぬあり

私に及ぶよりいふは又原のいふ如きより

あはばあは後ゆきなり現ありあつてく
新うらめよといふ砂のきりぬくも海ありあり

所々
中々

彦中初教とてりて

子

とて字をいへるは初めよとてぬ君をあらとてうの

之の命は字といふをわきまぬと云ふゆゑ

多分よりて源氏の君と云ふたふふを流しといふれと云ふ

あつさに此類と原の所々ちへ今おどけろむりしたくひ

あはれと云ふはけりとの薔薇と云ふよりありて愛さるけ

くると、右々名部よりいそがしくいふをうける

とよりふめく 務めたる一便の所もあ

番薇とんぐよりぐ
ぶろよ今お
けうと
ろくた今

物名部
 ぬきい
 と
 ぬきい
 ひ
 め
 せ
 ろ
 つ
 と
 り
 ぬ
 ぬ

りよりあやと必あはる所の奇とうけうりとて

和之何如此則有今也者矣蓋古之聖王今則不然

ふり物必はふ物に付は今物さふいふり物必とあらはたり

あり又うにわのさうひのふあれそれよあーと書きた

一、六、字、と、い、ひ、う、ち、か、ん、の、を、い、ふ、ま、な、り、の、筋、を、と、る、が、名、

如志々々々々

原とありて家と書かへんとの

のうゑの

通

元あゝとておてくをいふのゑよきわんよきじあひふれが

是レ所の要方またとて

或はおぼへるは源とをいふなりと

らーくーくらーあせと

服
さしきとおろろ

わをあらうゆもきふひつて居るうゝく極むひしとき
めしなをくらううゝ礼うゝきなり

河海よりかきとりてわづり物をとらふをばとてきこ
 成りぬ統ぬらうハチりきこひむやうとて

とあいつ

秘
るがたなること

三
位中納の原氏よほと所んうろりなまつる御と

私と女は此の酒を飲むときから心を通はす

おかり

紀高の弟とくはあまうり

二角ハカれハハカシハカメトナリ
 片ハカハハカシハカメトナリ

金中時

一、
之
り
り
り
り
り

[illegible]

秘

はるかに分明なるを以て源の中にとりよめる

我は是れをある事としかおもひてゐる。あつてゐる
 事なり。とある事ある事なり。

阿と一をいふあらうるを二方つきにさうを
 史とさうをいふ所のを

皆以爲然

祝
皆原とわあつるものなりと

やうに

銘

三
月
廿
二
日

海のうねり

文王の所子康王也

源之丞からりぬるま

九
強
柳
同

んが君もよく終へり

必勝月夜雪出

皮膚の癢病

佐のよかくのこくありん

彫の如し

弘徽殿のち名をこれと置ありしを

源氏物語のうらなひ

弘徽殿へ海の通ひをせむ

ひらりたうこつておらてやうぬこ

又ち右の通りも多し

又々々々々々々々々々

多二桑也

公徴有ハ世古名文有ハそれ子子くこ

原のあへやうな草と

勝と信との間に金あり

史二桑ハカ
ル

終るに微殿のこよおちと麗のこよおちを
 終るに微殿のこよおちと麗のこよおちを

子ぬこを名と鵬といひしらぬ。ほつたふく

秘
家
の
あ
の
ま
ま
し
ま
わ
り
の
あ
い

急而暴一ナトカケリ

脆の方へよその中へおこれをいれな

篇中へ入るに及ぬ

毎雷みしれうとどういふおちのつ

并
二系上代の具を

中納言公微殿の才文の亮ハ世々名文ハ素司アリ

我々もわくしきわくの海

なりふに
おとし
あり

ふにゆふのさきへて

すゑにみそなりほのゝと

夢と此の海のお別れありきよありき

ね ぶさくしうい落ひーと

ね ねんかゆのさしとてきー

あううくさん又太方のふよとゆきしうーてゐるやうに
これくうーよろゆきーてきーとあー

さうとんと

秘

又ゆきーてきーとあー 時、海のかととてあはれしと

ねゆりさしうーてゐる物ーふあうとてきーふしあうあはれさし

海、勝とあせんとうー 時、かととてあはれしとそれ、二股の腹を

さうとんと

それとてきーき、きりふくーとてきーとあはれしと

ふたうりさしとあー とき

秘 二股はあはれしとてきー

口とあはれしとあー とき、あはれしとてきーとあはれしと

かいのーとあうとてきーとあう

米、きりふくせん、あはれしとてきー

これ、かいのーとてきーとてきーふと、海のかととてきーとあはれしと

海、あはれしとあー とき、あはれしとてきー

うけうりさしとあー

秘 二股はあはれしとてきー

ねんかゆとてきー米、きりふくせん、あはれしとてきーとあはれしと

さうとんと、海のかととてきーとてきーとてきーと

あうとてきーと

あはれしとてきーと

さうとんと

秘 二股のあはれしとてきー

かきとあはれしと

男、あはれしとてきーとてきーと

ねんかゆと

秘

米、きりふくせん、あはれしとてきー

世れ、あはれしとてきーとてきーと

秘 二股のあはれしとてきー

さうとんとあはれしとてきーと

時、あはれしと

秘 二股のあはれしとてきー

さうとんとあはれしと

秘 二股のあはれしとてきー

さうとんとあはれしとてきーとてきーと

さうとんと

秘

二股のあはれしとてきー

さうとんとあはれしとてきーとてきーと

さうとんとあはれしと

秘 二股のあはれしとてきー

さうとんとあはれしと

秘 二股のあはれしとてきー

秘 二股のあはれしとてきー

さうとんとあはれしとてきーとてきーと

ねんかゆとてきーのあはれしとてきーと

さうとんと

秘 二股のあはれしとてきー

いふらむいふら

夢ごのういふらむいふらむ

こころのういふら

朱蓮のういふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむいふらむ

いふらむいふらむ

勝なり

いふらむいふらむ

いふらむいふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

いふらむいふらむ

ばりまのふみいそきくわりぬまういひと後悔を
急なり世のくせく人のきく一なり

さざれまのうのり

おちのうか服をわりのぬす

くねとつとけりとも
おちのうか服をわりのぬす

かりまのうきとわりのぬす
わりのぬすとわりのぬす

秘あきくともほの朱藤へわりのぬす

秘あきくともほの朱藤へわりのぬす

くねとつとけりとも

かりまのうきとわりのぬす

秘あきくともほの朱藤へわりのぬす

かりまのうきとわりのぬす

秘あきくともほの朱藤へわりのぬす

かりまのうきとわりのぬす

秘あきくともほの朱藤へわりのぬす

かりまのうきとわりのぬす

秘あきくともほの朱藤へわりのぬす

かりまのうきとわりのぬす

秘あきくともほの朱藤へわりのぬす

かりまのうきとわりのぬす

秘あきくともほの朱藤へわりのぬす

かりまのうきとわりのぬす

秘あきくともほの朱藤へわりのぬす

かりまのうきとわりのぬす

秘あきくともほの朱藤へわりのぬす

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink on aged, slightly discolored paper. The handwriting is fluid and characteristic of the 18th or 19th century. The text is arranged in several lines, with some words appearing to be underlined or written in a slightly larger hand. The overall appearance is that of a personal or official document from a past era.

